

車ドア周辺部品、付加価値創出



自動車ドアシステムやコントロールケープルなどを手がけるハイレックスコーポレーションは、2025年内に三井金属アクト（横浜市区）を子会社化する。三井金属アクトは自動車ドアのロックに欠かせないドアラッチといったドア周辺部品のメーカー。子会社化によってドア周りの各部品を一体提案し、付加価値向上などを狙う。ハイレックスコーポレーションの寺浦太郎社長に背景や戦略を聞いた。

□ □

—10—12月に三井金属アクトの全株式を三井金属から取得予定です。子会社化の背景は。

「地域差はあるが、自動車生産台数は2015年ごろからあまり変わっていない。生産台数に影響される当社

ハイレックスコーポレーション社長 寺浦 太郎氏

ユニット・パッケージ化提案

は、同時期から利益率の融合はどのような形で提案すれば社会課
 が下がってきた。ソフ果をもたりますか。題の解決にもつなが
 トウエア定義車両（S「労働人口の減少、差別化もできる」
 DV）などの技術変革で、自動車メーカーで——関税影響など足元
 があっても、当社は『生産ラインをシンの事業環境は。

化提案

減少傾向ですが、培った技術を自動車業界以外に展開しています。

「医療機器や住宅設備などに提供しているが、転落防止の昇降式点が活用したい」

ホーム柵は顧客の声かけがあつて実現した。ここに使えるという発想がなかった。意識と行動を変え、能動的に新用途を探していく。こうした新しい領域の製品を作る場所として、ケーブルの生産拠点を活用したい」

ユレターや三井金属「化したい」という二一で、北米事業は貿易協定『米国・メキシコ・アクトのドラッチはズが高まっている。さらに自動車メーカーがカナダ協定（USMCディティ―（汎用品）ソフト開発に力を入れる中で、ドアなどの既存部品はワンストップ（A）』に適合する製品化から抜けられなくなるという危機感を両社が持っていた。三井金属アクトとともに新たな付加価値を作り、ドアシステムサプライヤーになるというビジョンの実現に向けて大きく踏み出す」

―2社の製品や技術パッケージ化といったルケーブルは電動化で

記者の目

記者の目

ハイレックスコーポレーションは自動車向けが売上高の9割以上を占める。電動化の波に押されコントロールケープルの販売が減少。生産体制の最適化を進めつつ、非自動車向け製品の拠点としての活用も模索する。

持続的成長に向けて、三井金属アクトとの連携による「ドアシステムサプライヤー」への進化とともに、非自動車事業の拡大の動きに注目したい。

（大阪・新庄悠）

非車事業拡大の動きにも注目